

4年ぶりにおとずれた福島

コロナ禍で延期していた福島県を4年ぶりに訪れた。この間に、道路交通網を含めた外形上、表面上の「復興」、特にインフラの整備は著しく進み、かつて散見されたフレコンバックも、注視しなければ見つけることができないような状態になっていた。(常磐道から見えた除染されていた土地も、現在は雑木林になり、そこにあったフレコンバックも見えなくなっていた)。国道6号(福島第一、第二原発、Jビレッジなどに近い)にあった「バイク、軽車両、歩行者通行禁止」の標識にも出会うことはなかったように思われる。しかし、311以降、主をなくした民家や店舗が、手つかずのまま放置され、朽ち始めているところも多々あった。

まず大きく変わったのは、地元メディアの報道であろう。新聞も含めて、地元局ベースの報道は激減し、キー局の「ワイドショー」ニュースが極端に増加していた。さらに、TVの天気予報の最後に流れていた各地の空間線量が一部の民放を除いて、NHKも含めて終了していた。確かに、以前に比べれば低減はしてはいるが、私の線量計レベルでも公園や緑地帯の線量は決して低いわけではない。それに代わり、地元報道の柱になりつつあるのが、行政を主体とした「ホープツーリズム(福島の「今」を感じる旅)」だった。

<https://www.hopetourism.jp/>

その代表格が、福島県双葉町中野地区に約53億円の経費で建てられた3階建て、延べ床面積5,300平方メートルの「東日本大震災・原子力災害伝承館」だろう。町の佇まいとは対照的で近代的な施設で、「事故の記録や教訓を後世に残す」「ありのままの姿(光と影)」を展示・学習する場というが、原発問題、汚染水処理など原子力災害の過去への原因追究、現在の状況分析が極めて薄く、その代わりに、共にフクシマの将来を創造しよう!という部分には大きな力点が置かれていることが顕著だった。あちこちに「福島の問題を『他人事』から『自分事』へ」という学びのポイントが示され、「福島で感じた希望。それは明日の学びの原動力▶▶参加者の成長へ!」なる学びの効果まで明示されている。学びは自由なはずだ、学びまでコントロールしようとする意思を示していることそのものが、自由な学びの場ではない証だ。学習旅行で来ていた中学生たちが、併設する公園にある広い芝生の上を転げまわる姿には言葉がなかった(まだ、不安定な状態が続く福島第一原発からわずか数キロしかない)。

<https://www.fipo.or.jp/lore/>

震災時、メディアが殺到した常磐線富岡駅も訪れてみたが、他の地域と同じくインフラの整備は進み、新築の住宅も立ち並び、かつての風景とは一変していた。ただ、富岡町役場で尋ねると、住民登録に占める帰還率(2022年度)は、22.9%となっているものの、元の町民の帰還は多く見積もって1割ぐらいしかないようなニュアンスで話す。残りは、自治体

などが募集した移住者（宮崎からの移住者にも出会った、移住支援金も出る）、東電関係者の単身赴任が目立つということだった。駅前で会った男性に聞くと「安全と行政も発表しているし、自分も住んでいるのだから大丈夫だ！なぜ、帰ってこない！」と語気を強める一方で、「年寄の友達には帰ってきてほしいが、帰ってくる家もないし、親族は何があるかわからないので、今の居住地で生活を立ててほしい」と本音と思われることを弱弱しく伝える姿も。「駅前の食堂、うまかったな、あのあたりだ」と指さす姿も、何となく寂しそうだった。通院する病院がないともつぶやいていたが、確かに都市部で見られる医院、クリニック、調剤薬局などが極端に少ない。いや、ほとんどないといっていいのかもしれない。

他の地区も訪れたが紙面の関係上、省かせてもらった。現在のような表面上の「復興」が進めば進むほど、本来、第一の課題とされるべき、子どもたちの保護、原発事故、廃炉、汚染水処理などという生命に関わる最優先されるべきものが、個々の判断に内部化され、その延長線で人と人との分断を引き起こしている状態にたびたび出会った。あまりに問題が深刻・複雑すぎて個人の範疇を越えてしまっているような気がしてならない。行政・メディア・SNS などの情報を信じるか否かで対立が起こって、数年間会話すらしていない家族もあるそうだ。あるグループのなかで「安全な食品を」というと「メディアが大丈夫って言っているじゃないの」と白眼視されるような本末転倒の状況、極端な場合は離婚ということも導いてしまっているようだ。

今回、人影が少ない街を眺めながら、答えがない自問の繰り返しだった。われわれは、10年という時間上の単位で福島を見つめてしまいがちであるが、それは我々が無意識に線引きをした時の刻みに過ぎず、事故以降の問題はさらに深刻化しているといっても過言ではないと思う。福島第一原発事故に伴う行政の対応は、かつての水俣病のコンテクストを福島に「うまく活用している」ようにしか見えないのは私だけだろうか？今も水俣の有機水銀は、ある温度を越えると気化して空气中に漂うことをご存じだろうか？水俣の問題も現在進行形なのであることを忘れてはならない。さきごろ、イギリスの教授が福島第一原発から放出しようとする汚染水に対して、「(1 リットルの) 10 倍ほどの水も飲むことができる」と述べ、汚染水の安全性を繰り返し擁護した。（「福島原発処理水はきれいな水」と主張した英国教授、韓国国会で「10 リットル飲む」）

<http://japan.hani.co.kr/arti/politics/46796.html?fbclid=IwAR31XDClQsx90LgjfY4N6OGkxcpJQ83kzuyvk9xPhih2XYZdllRp5N4Cy5g>

同じようなことがあったことを付記しておきたい。1959年、水俣病の追究が始まった頃、新日本窒素肥料株式会社水俣工場（チッソ）の吉岡喜一社長は完工式で水路から排水を飲み干し、「こんなにきれいです」というパフォーマンスを見せ、西田栄一工場長は「サイ클レーターを通した水は水俣川の水よりきれいになる」と説明したが、実はこの水は水道から引かれたものであった。

2023.5.23 文責 藤川寿彦